

山頭火と一茶

——「齒」をいかに詠んだか——

藤 田 万喜子

一、はじめに

「種田山頭火の俳句におけるオノマトベ表現」(岐阜聖徳学園大学紀要 第四八集 二〇〇九年)において山頭火の俳句に齒を詠んだ作品があったが、この詠みぶりをみると齒の衰えが老いにつながって捉えられていた。また、一茶においても齒を詠んだ作品があり、それにおいても同様であった。山頭火は五八歳、一茶は六四歳で亡くなっている。時代は異なるが、二人とも同じくらいの生を全うしたことになる。本稿ではそれぞれが齒を作品にどのように詠んだかについて考察したい。

二、山頭火の「齒」

山頭火が齒を詠んだ句は五〇句⁽¹⁾あった。それを表にすると表1・表2のようになる。

五〇歳(昭和七年)から齒にまつわる句が見え、同年には一一句を作っている。その後、二年間は一桁台に減ったが、五三歳では二桁台が増え、一二句作っている。その後の四年間は齒にまつわる作品が無く、五七歳で再び一二句、二桁台となっている。空白の四年間は齒への悩みが薄れていたと推測される。

まず、五〇歳(昭和七年)の一一句を記述順に考察したい。

一月二四日の日記に

(1) ほろりと抜けた齒ではある(再録)

とある。(傍線は筆者が付した。以下同じ。)

二月一三日付木村緑平宛書簡には「老来頓に元氣なし、足がいたい、眼がかすむ、さて、さて、さて。」に続けて、

(2) ほろりとおちた歯であるか

を書き送っている。足の痛みや眼のかすみに感じた老来に歯の衰えを重ねている。

歯の痛みに関する記述が日記に現れるのは四月二十九日で、「歯が痛む、春愁とでもいふのか、近くまた二本ぬけるだらう。」とあり、翌日三〇日の日記に

(3) ぬげさうな歯を持つて旅にをる

(4) ぬけた歯を見詰めてゐる

と自己の行動を客観描写した作品を載せている。翌日の五月一日は「熱があるとみえて歯がうづくには困つたが、洗濯したり読書したり、散歩したり談笑したり。」と日記に記し、歯の痛みを耐えていた。

この痛みは周期的にやってくるようで、二ヶ月後の七月二日の日記に、「発熱頭痛、まだ寝冷がよくならないのである、歯がチクチクいたむ、近々また三本ほろ／＼ぬげさうだ。」「例の歯をいぢくつてゐるうちに、ひよいとぬけてしまった、何となくがっかりとした気持である、さみしいといはうか、おかしいといはうか、何ともいへない感じだ。」「もう二本ぬげさうな歯がある！」とあり、これもとに

(5) 旅もをはりの、歯がみなうごく

(6) 見なほすやぬけた歯をしみじもと

(7) ほつくりぬけた歯で年とつた

(8) 投げた歯の音もしない木下間

(9) これが私の歯であつた一片

の五句を作っている。ひよいと抜けてしまった歯の感覚が「がっかりとした」「さみしい」「何ともいへない」気持ちとなつて、(6)の「しみじもと」「見なほす」句になり、(7)の「年とつた」に集約された。

この心境を引きずっているのが七月五日付木村緑平宛書簡にみえる

(10) ほつかりとぬけた歯で年とつた

の句である。「頭痛歯痛で(近くまた一本ぬけそうです)苦しんでます」と心境を添えている。この苦しみは続き、翌日の七月六日の日記には、「終日歯痛、歯が痛いと全身心がいたい、一本の歯が全身全心を支配するのである。」とまで語っている。しかし、その日の「夕方歯をいぢつてゐたら、ほろりとぬけた、そしていたみがびたりととまつた、光風霽月だ。これで今年三本の歯がなくなつた訳である、惜しいとは思はないが、何となくはかない気持だ。」と歯痛の苦しみから解放された心境を記している。この日に作った句は

(11) ほつくりぬけた歯を投げる夕間

であった。

一連の作品を見ると、(10)は(7)の改作で、「ほつくり」を「ほつかり」とに換えたのみである。これは歯の抜け方を表そうとするもので、作句順に並べてみると、(1)ほろりと、(2)ほろりと、(7)ほつくり、(10)ほつかりと、(11)ほつくりとあって、その形容をさぐっている。「ほろり」は、ものもろく散り落ちるさま、粒のやや大きい物が一度(一つ)こぼれ落ちるようすを表す。「ほつくり」は、やわらかく、みずみずしくふくらんでいるさま、性質のおだやかで円満なさまを表す。「ほつかり」は、事態が急に変わるさまを表す。歯の大きさ、抜け方に中心を置いて言葉を探っていることが分かる。推敲・改作を繰り返した一句のどれを佳しとしたのであろうか。山頭火が一代句集として後世に残した『草木塔』がある。これは、山頭火が亡くなる約半年前に刊行された句集である。これに収録されたのは

(1) ほろりとぬけた歯ではある

であった。歯の抜け方、しかも、そのもろさを選んだと言える。

歯痛と苦惱

以後、山頭火の歯は次々に抜けてとうとう全てが抜けることになる。その間は、抜けそうな歯に苦しめられている句が多い。

昭和一〇年(五三歳)六月一三日の日記に「朝御飯を食べているとき、ほろりと歯がぬけた、ぬけさうでぬけなかつた歯である、ぶらぶらぐいいて私の神経をいらくくさせてゐた歯である、もう最後のそれにちかい歯である、その歯がぬけたのだからさつぱりした、さつぱりしたと同時に、何となくさびしく感じる、一種の空虚を感じるのである。午前中読書、しづかなよろこび。」とある。最後に近い歯のぐらぐらしていたのが抜けた感想は「さつぱりした」であった。この歯がいかに神経をいらだたせていたかが伝わってくる。この日の歯の作品は、

(12) 空う梅雨の風のふく歯がぬけた

(13) ぬけた歯を投げ捨てて雑草の風

(14) ぬけるだけはぬけてしまつて歯のない初夏

(15) 歯のぬけた日の、空ふかい昼月

となっている。これらの句にはどこことなく明るさがある。(8)の「歯の音もしない木下闇」、(11)の「歯を投げる夕闇」がもたらす暗さは無い。山頭火の言う「さつぱり」感が、(12)や(13)では風によって表されているし、(14)や(15)では初夏のすがすがしさや空にかかる昼月による空間によって表されているからである。

山頭火の言う「しづかなよろこび」は、それ以前の歯を詠んだ作品と比べるとはつきり浮かび上がってくる。詠みぶりが明らかに異

なっているからである。

(16) 噛みしめる味も抜けさうな歯で

(17) 噛みしめる味はいも抜けさうな歯で

(18) 花ぐもりの、ぬけさうな歯のぬけないやみ

(19) 梅雨めく雲でぬけさうなぬけない歯で

(16) と (17) は五二歳(昭和九年)の作で、(18) と (19) は

五三歳(昭和一〇年)の作である。「抜けさうな歯」は、五二歳より五三歳の頃の方が山頭火を苦しめていた。いらいら感が最も出ているのは(18)で、桜が咲く頃の少し寒い曇り日に抜けさうで抜けない歯を抱えた「なやみ」を体言止めを用いて強く印象付けている。(19)には(18)のような直接的な言葉はないが、対句表現を用いることで、「梅雨」の鬱陶しさに相当する歯の抜けないいらいら感を表現している。これらに対して、五二歳作の(16)と(17)は、ぐらぐらしている歯で物を噛んで、その味を味わうようなゆとりがあったことが窺い知れる。

以上の(12)から(19)中、『草木塔』に収録して後世に残そうとした句は(16)であった。物を噛んでそれを味わう喜びを表現した句を選んでいる。

老いの自覚

先の六月一三日の日記に記された「さつぱりしたと同時に、何となくさびしく感じる」に戻って考えてみたい。悩まされ続けた歯が抜けたのだから「さつぱりした」のは当然のことと言える。では、「何となくさびしく感じる」は何故であろうか。

昭和八年(五一歳)一月二一日の日記に「急に眼の工合が悪くなつた、栄養不良のためか、老眼と近眼とのこんがらがりのためか、とにかくこれでは困る、といったところで詮方もないけれど。」という記述がある。男性の老化の進行を表す言葉に「歯目」云々という言葉がある。身体の衰えが症状としてあらわれる部位のことで、歯は歯槽膿漏(歯周病)や歯肉炎、固いものが噛めないといった症状を指し、目は視力低下、細かい文字が読めないといった老眼の症状を指す。山頭火も歯や目に老いを自覚し、困っても仕方がないと嘆きあきらめている。このことは「めっきり老いばれた私は歯のないう口をもぐもぐさせてゐる。自嘲一句、微苦笑の心境。」という前書きの

(20) 抜けたら抜けたままの歯のない口で

(21) 山裾やすらかに歯のなくらしも

という五七歳(昭和一四年)の作品でも分かる。自らは「自嘲」と述べているが、一種の開き直りのようにも、また、達観(悟り)のようにも感じられる句である。

五七歳は先に述べたように四年間の空白を経て再び歯を素材にした作品が見られる年である。同年の作品には次のような句がある。

(22) ほろりと最後の歯もぬけてうらゝか

(23) 春寒抜けさうで抜けない歯だ

(24) ぶらぶらぬけさうな歯をつけて旅をつゞける

(25) ぬけさうな歯がぬけてほつと信濃の月

(26) ぼろりと歯がぬけてくれて大阪の月あかり

(27) 銭がない物がない歯がない一人

(23) や(24) は四年前を回想して作ったと思われるが、(24) が記されている五月三日の日記に「今日は足が痛い、衰へたりな山頭火、旅をつゞけてゐると、更に老を感じる。」とあって、身体の衰えを意識している。老いに重ねて歯を詠んでいることが分かる。

ここで注目したいのは筆者が傍線を付した三句である。

(22) は最後の歯が抜けたときに詠んだと思われる句。(1) の句のように「ほろり」を使って歯の抜け方を詠んでいるが、異なる点は句末が「うららか」と悟りのような感じを受ける自己の心象で結ばれている点である。この「ほろり」に似た「ぼろり」を配した(26) では、「ぼろり歯がぬけてくれて」と言いさして「大阪の月あかり」で結ばれ、焦点が天然の景に移って、苦痛から抜け出した安堵を思わせるようになっていいる。また、意味は「ほろり」と同じだ

が「ぼろり」と半濁音になっていることで、弾力的ではずんだ感じがあっけらかんとした印象になっている。ここには四年前のような苦悩は感じられない。このことがより分かる句が(25)である。「ほつと」は、安心したり、緊張などから解き放されて太く息をつくさまを表す。これは、歯の抜け方ではなく歯が抜けた後の山頭火の気持ちを表している。以上を整理すると、(22) 最後の歯もぬけてうらゝか↓(25) ぬけさうな歯がぬけてほつと↓(26) 歯がぬけてくれて大阪の月あかり、となる。いずれも、澄んだ句で、内面を研ぎ澄まし、山頭火が求めた象徴的表現・身心の純化になっていると言えよう。

空白の四年間を境に、それ以前は歯そのもの、あるいは、歯による苦悩が詠まれ、それ以降は歯からの解放、更に言えば、身心の純化が詠まれているのである。

三、一茶の「歯」

一茶も山頭火同様多作家であったが、一茶が歯そのものを詠んだ句は二一句、また、歯に関連する句を詠んだものは四句あった。それを表にすると表3・表4のようになる。

四三歳(文化三年)から歯にまつわる句が見え、五〇歳(文化一〇年)が最も多く四句で、それまでは一句ずつ作っている。その後

は、五六歳（文政二年）と五九歳（文政五年）で三句、それ以外は二句乃至は一句の作となっている。空白期間は五年だが、作句数において、山頭火のようなうねりは一茶にはない。一茶が歯を最も多く詠んだ年は山頭火が歯を詠み始めた年と重なり、興味深い。

一茶は、どのように歯を詠んでいったのであろうか。

四三歳の句は

1 初霜や茎の歯ぎれも去年まで

である。この句の「茎」は茎漬けのこと、蕪青や大根の茎や葉を塩または麴で漬けたものである。その鮮やかな緑の色と歯切れのよさが食べる喜びである。ところが、この句の場合は「去年まで」と言うわけで、今年はめっきり歯が弱って、その漬け物が歯切れ良く噛み切れなくなったことよ、去年まではよかったのだがと言う。気落ちした感じが詠まれている。

このような歯の衰えを比喩的に詠んだ句に、

2 がりくくと竹かぢりけりきりぎりす

3 歯ぎしり（み）の拍子とる也きりぎりす

がある。2は四八歳（文化八年）、3は五七歳（文政三年）の句。

2は、「十六日の昼ごろ、きせるの中塞りてければ、麦わらのやうに竹をけづりてさし入置たりけるに、中につまりてふつにぬけず、

竹の先わずかに爪のかゝる程なれば、すべきやうなく、欠残りたる

おく歯にてしかと啞へて引たりけるに、竹ハぬけずして、歯ハめり

くとぬけおちぬ。あはれ、あが仏とたのミたる歯なりけるに、さ

うなきあやまちせしもの哉。」「齡のひたものぢゞまり行くことを、

今片われの歯を見るにつけッゝ思ひしられぬ。」（『我春集』⁶）の前書

きによって、「あが仏」と自分が一番大切に思っていた奥歯を失っ

てとんでもないことをしてしまったと嘆いていることが分かる。き

せるに噛みついた身の程知らずな自分を竹籠をかじるきりぎりすに

なぞらえている。老残の身を嘲りいたむ気持ち詠み込んでいるの

である。一茶独特の発想の句。「がりがり」という擬音語も効果的

に使われている。3の「歯ぎしり」は「歯軋り」のこと、歯軋りの

リズムをきりぎりすの姿態に比したものである。

このように、一茶は独特の発想で作品を作るが、有季定型である。

季語の本意と関わって歯が捉えられている。そこで、季語を軸にし

て作品を取り上げて考察したい。

今回の調査で「歯固め」の季語の作品は全部で七句あった。

4 歯固にかんといはする小粒哉 56歳

5 歯固の歯一枚もなかりけり 56歳

6 人並に歯茎などもかためしか 58歳

7 台所の爺に歯固勝れけり 58歳

8 人真似に齒莖がための豆麩哉 60歳

9 かたむべき齒は一本もなかりけり 作句年未詳

10 齒固は猫に勝れて笑ひけり 作句年未詳

「齒固め」は、新年の季語。正月三ヶ日の間、齒を固め長命を願って、鏡餅・猪・鹿・大根などを食べる行事。齒は、齡の意味で齡を固め長命を願う心だと言う。嘯む齒は生命の象徴なのである。

世の中の人々は、新しい年を迎え、長寿を願って齒固めの行事を行っているのに自分はそれをするべき齒が一本も無いと言うのが5の句である。「けり」で結んでその感慨に中心を置いている。五六歳には全てが抜けてしまっていたことが分かる。それでも齒固めを行っている。五八歳（文政四年）になると、人並みに齒莖で試してみようかとなり、六〇歳（文政六年）では、その齒莖がために豆麩（とうふ）でしているのである。齒に対する執着を読み取ることができる。

多面的な詠みぶり

では、いつ頃に齒が抜け落ちてしまったのであろうか。

11 ナケナシの齒を秋風の吹にけり 45歳

12 なけなしの齒をゆるがしぬ秋の風 46歳

13 山桜花をしみれば齒のほしき 47歳

14 花げしのふはつくやうな前齒哉 49歳

15 すりこ木のやうな齒莖も花の春 50歳

16 福豆や福梅ぼしや齒にあはぬ「ず」 50歳

17 かくれ家や齒のない口で福は内 50歳

18 高砂や鬼追出も齒ぬけ声 50歳

19 齒ももたぬ口に啞へてつき穂哉 57歳

20 翌ありと齒なしも吹くや鳩の真似 59歳

21 齒もたぬ鳩吹いつち上手也 59歳

22 負け「ぬ」きに栗の皮むく入齒哉 59歳

23 わか水の齒に染のもむかし哉 61歳

24 茎漬の水こごりを齒切哉 61歳

11から14はまだ齒があったと思われる句である。11と12は「秋風」に取り合わせている。この季語によってわびしい感じがして、しかも、「なけなしの齒」と言うことからずいぶん齒が抜け落ちていることが分かる。まだ残っている齒に風が吹き当たると揺らぐように感じると言うのであるから、痛みがともなっていたとも推測できる。13は、美しい桜の花が散っていくのを惜しむ気持ちがあるまま「齒のほしき」に繋がっている。齒が欲しいという願望が直接迫ってくるようである。14は、抜けそうな齒のぐらぐらしてふわつくような感じを「芥子の花」（夏季）のふわふわした感じに喩えて表している。

る。先の2の句と同様の手法と言える。13や14の句は、美しい季語を配することで歯を失う不安や負の心情を強調している。

五〇歳の句を見ると「すりこ木のやうな歯茎」「歯のない口」「歯ぬけ声」とある。「花の春」は新年の季語なので、五〇歳を前にすべの歯を失ってしまったことが分かる。

ところで、一茶五〇歳の年は、実家との遺産相続の争いが解決し、故郷に定住することになった年で、江戸帰りの宗匠として暮らし始めた年である。翌年は「千代の小松と祝ひはやされて、行すゑの幸有らん迎、隣々へ酒ふるまひて」という前書きを置いて、

五十智天窓をかくす扇かな

の句を作っている。歯は抜けて「すりこ木のやうな歯茎」になってしまったが、財産も持ち、妻を迎え、人並みの暮らしができるようになった。このような生活がもたらす心の張りが19から22のような作品を作り出しているのかも知れない。

19の季語は「つぎ穂（接ぎ木）」（春季）で接ぎ木すること。歯のない口で接ぎ木の枝を咥え、作業をしている。20・21の季語は「鳩吹く」（秋季）で両手を合わせて鳩の鳴くような音を出すこと。歯が無くては上手く吹けないだろうに、「翌あり」と強い意志の感じられる句となり、「いつち（一番）上手也」と賞賛する句となっている。さらに、22では栗の固い皮を負けるものかと入れ歯の口で

剥いているという。22の季語は「栗」（秋季）である。

心の張りばかりではなく、一茶の性格に依るのかも知れないが、いずれも力強い印象を受ける句となっている。

22の「入れ歯」のやうなものを句の素材にする一茶の生活感覚は、
25 朝霜や歯磨売とくらはず売 56歳

にも現れている。「歯磨売」は歯磨き粉を売る者。「くらはず」は雪花菜、おから、うのはなのこと。「くらはず売」はそれを売る者。歯のない一茶がこのやうな素材にも眼を向ける点に山頭火との違いを見出すことができる。世の中への向かい方、或いは、生活力の基盤の違いであろうか。

残る23・24は昔の感覚を思い出している句であろう。23の「わか水（若水）」は新年の季語。年があらたまつて、元旦の朝にまず汲む水と言う。若水汲みは年頭最初の行事として大事にされていた。その水を飲んだときに昔は歯にしてみたのだが今はその冷たさが染みる歯がないというのである。24は茎漬を食べようとしたら水凝りのために歯切り（歯ぎしり）しているよと悔しがっている。背景にあるのは歯の丈夫さへの憧れであろう。

四、おわりに

以上、山頭火と一茶の齒の詠みぶりをみてきたが、齒に老いを意識し、受け入れているという点では共通していた。しかし、その表現(作品)から受け取れる印象は違うものであった。それはどこから来るのであろうか。

山頭火の句は日記に記した日常のつぶやきが即作品になっていた。山頭火は、世の中から隔絶し、捨て身の生き方だった。煩惱とも言うべきいろいろのものをそぎ落として自分の句を作ろう、それだけになったときに悟りのようなものが生まれ、暗い、苦しい句から明るい句に純化したのだと考える。

一方、一茶には野望(目標)があった。それに向かって人生を作り上げるといった姿勢があった。故郷に帰り、妻帯し、江戸帰りの宗匠として門人の指導に当たった。常に生活者として世の中に向かっていった。その生活力が多面的な句、素材の広がりにつながったのではないだろうかと考える。

注

- (1) 『山頭火全句集』(春陽堂書店 平一四・一二刊)
- (2) 『山頭火全句集』(春陽堂書店 平一四・一二刊)に「日記9・16」の作とあるが、『山頭火全集』第十巻の昭和十五年九月五日の日記に見え、九月五日の作と思われる。
- (3) 日記昭和十一年二月二日『山頭火全集』第七巻昭六二・

五刊)・日記昭和十五年一月三日『山頭火全集』第十巻

春陽堂書店 昭六二・一一刊)

(4) 『一茶全集』第一巻(信濃毎日新聞社 昭五四・八刊)

(5) 芭蕉には、「齒」を詠んだ、

結ぶよりはや齒にひびく泉かな 46歳

衰や齒に喰あてし海苔の砂 48歳

があって、一茶と同様、「齒」の悩みを抱え、老いを意識していたと分かる。

(6) 『一茶全集』第六巻(信濃毎日新聞社 昭五一・一一刊)

(7) 当時の入れ歯は木製義歯床、材質が強靱で肌触りの良い黄楊で作られている。高価なもので、滝沢馬琴が使用した入れ歯代金は壱両三分、当時の米価にしておよそ米一石という大金だった。(『近世病草紙―江戸時代の病氣と医療―』平凡社一九七九・二刊)

元禄(一六八〇年頃)時代ですでに入れ歯という言葉が一般に使われていた。(『江戸の入れ歯師たち―木床義歯の物語―』一世出版株式会社 平二二・二刊)

(8) 寛永二〇年(一六四三年)に丁字屋喜右衛門が朝鮮人の伝を受けて製造したのを始めとする。店売り、小間物屋によるふれ売りのほかに、香具師によっても売られた。(『角川古語大辞典』四巻 角川書店 平六・一〇刊)

表1 山頭火における年齢別「歯」作品の数

年齢	50	51	52	53	57	58	
句数	11	6	7	12	12	2	合計50

表2 山頭火の「歯」作品

作品	年齢	年代	掲載句集・雑誌・日記・書簡・句帖
ほろりと抜けた歯ではある	50	昭和7年	草木塔/層雲4月号/日記7. 1. 24
ほろりとおちた歯であるか	50	昭和7年	書簡7. 2. 13
ぬげさうな歯を持って旅にをる	50	昭和7年	日記7. 4. 30
ぬけた歯を見詰めてみる	50	昭和7年	日記7. 4. 30
旅もをはりの、歯がみなうごく	50	昭和7年	日記7. 7. 2
見なほすやぬけた歯をしみじみと	50	昭和7年	日記7. 7. 2
ほつくりぬけた歯で年とつた	50	昭和7年	日記7. 7. 2
投げた歯の音もしない木下歯	50	昭和7年	日記7. 7. 2
これが私の歯であつた一片	50	昭和7年	日記7. 7. 2
ほつかりとぬけた歯で年とつた	50	昭和7年	書簡7. 7. 5
ほつくりぬけた歯を投げる夕歯	50	昭和7年	日記7. 7. 6
つめたさの歯にしみる歯をいたはらう	51	昭和8年	日記8. 1. 21
歯がまたぬけた朝から百舌鳥がするどい	51	昭和8年	日記8. 9~10
お茶のうまさも歯にしみとほる秋となり	51	昭和8年	日記8. 11~12
風をきつゝ抜ける歯のいたみをかみしめつゝ	51	昭和8年	日記8. 11~12
歯がうづくまつしぐらに自動車がかかる	51	昭和8年	日記8. 11~12
年も暮れようとして歯がぬけた	51	昭和8年	日記8. 11~12
冬がまた来てまた歯がぬけることも	52	昭和9年	草木塔
噛みしめる味も抜けさうな歯で	52	昭和9年	草木塔
年も暮れようとして歯がぬけた(未定稿)	52	昭和9年	雑誌「松」1月
笑えば金歯が見える春風	52	昭和9年	日記9. 3. 18
百舌鳥のするどくぬける歯はぬけてしまふ	52	昭和9年	日記9. 11. 5
噛みしめる味はほも抜けさうな歯で	52	昭和9年	日記9. 12. 14
年も暮れようとして歯がぬけた	52	昭和9年	書簡9. 12. 23
噛みしめる味はほも抜けさうな歯で	53	昭和10年	層雲3月号
ぬけた歯を投げたところが冬草	53	昭和10年	日記10. 1. 18
花ぐもりの、ぬげさうな歯のぬけないやみ	53	昭和10年	日記10. 2. 14
たつた一本の歯がいたみます	53	昭和10年	日記10. 3. 25
花ぐもりの、ぬげさうな歯のぬけないやみ	53	昭和10年	日記10. 4. 2
歯見べんたうほろつと歯がぬけた	53	昭和10年	日記10. 4. 7
梅雨めく雲でぬげさうなぬけない歯で	53	昭和10年	日記10. 6. 10
空う梅雨の風のふく歯がぬけた	53	昭和10年	日記10. 6. 13
ぬけた歯を投げ捨てて雑草の風	53	昭和10年	日記10. 6. 13
ぬけるだけはぬけてしまつて歯のない初夏	53	昭和10年	日記10. 6. 13
歯のぬけた日の、空ふかい昼月	53	昭和10年	日記10. 6. 13
そのなつかしさもかみしめる歯がぬけてしまつて	53	昭和10年	日記10. 7. 4, 5
ほろりと最後の歯もぬけてうらゝか	57	昭和14年	日記14. 4. 18
春寒抜けさうで抜けない歯だ	57	昭和14年	日記14. 4. 25
ぶらぶらぬげさうな歯をつけて旅をつづける	57	昭和14年	日記14. 5. 3
ぬげさうな歯がぬけてほつと信濃の月	57	昭和14年	日記14. 5. 4
春の夜ふけるとぬけるまへの歯のなやみ	57	昭和14年	日記14. 5. 4
ぬけた歯はそこの朝風に抜け捨てゝ	57	昭和14年	日記14. 5. 11
ぼろりと歯がぬけてくれて大阪の月あかり	57	昭和14年	日記14. 5. 11
抜けたら抜けたままの歯のない口で	57	昭和14年	句帖
山裾やすらかに歯のないくらしも	57	昭和14年	句帖
春寒ぬげさうでぬけない歯	57	昭和14年	初出不明
旅もをはりのやつと歯がぬけた	57	昭和14年	初出不明
ぬげさうな歯がやつとぬけて信濃の月	57	昭和14年	初出不明
銭がない物がない歯がない一人	58	昭和15年	日記15. 9. 5
お正月の歯のない口が鯛の子するする	58	昭和15年	句帖

表3 一茶における年齢別「歯」作品の数

年齢	43	45	46	47	48	49	50	56	57	58	59	60	61	年代未詳	合計
歯そのものの句数		1	1	1		1	4	2	1	2	3	1	2	2	21
歯に関連する句数	1				1			1	1						4
年齢計	1	1	1	1	1	1	4	3	2	2	3	1	2	2	25

表4 一茶の「歯」作品

作品	年齢	年代	掲載句集
ナケナシの歯を秋風の吹（ふき）にけり	45	化5	化五六句記
なけなしの歯をゆるがしぬ秋の風	46	化6	化五六句記
山桜花をしみれば歯のほしき	47	化7	七番日記
花げしのふはつくやうな前歯哉	49	化9	七番日記
すりこ木のやうな歯茎も花の春	50	化10	七番日記
福豆や福梅ぼしや歯にあはぬ[ず]	50	化10	七番日記
かくれ家や歯のない口で福は内	50	化10	七番日記
高砂や鬼追出も歯ぬけ声	50	化10	七番日記
歯固[はがため]にかんといはする小粒哉	56	政2	八番日記
歯固の歯一枚もなかりけり	56	政2	八番日記
歯ももたぬ口に加（啞）へてつぎ穂哉	57	政3	八番日記
人並に歯茎などでもかためしか	58	政4	八番日記
台所の爺に歯固勝れけり	58	政4	八番日記
翌（あす）ありと歯なしも吹くや鳩の真似（まね）	59	政5	文政句帖
歯もたぬ鳩吹いつち上手也	59	政5	文政句帖
負け[ぬ]きに栗の皮むく入歯（いれば）哉	59	政5	文政句帖
人真似に歯茎がための豆麩哉	60	政6	文政句帖
わか水の歯に染[しむる]のもむかし哉	61	政7	文政句帖
茎漬（くきづけ）の水ごりを歯切（はぎり）哉	61	政7	文政句帖
かたむべき歯は一本もなかりけり		未詳	希杖本
歯固は猫に勝れて笑ひけり		未詳	希杖本
初霜や茎の歯ぎれも去年まで	43	化3	文化句帖
がり〜と竹かぢりけりきりぎりす	48	化8	七番日記
朝霜や歯磨壳（うり）ときらず壳	56	政2	八番日記
歯ぎしり（み）の拍子とる也きりぎりす	57	政3	八番日記